

【北條報告の趣旨】

最初に**福岡県平原 1 号墓**の配置から復原される、弥生時代末の農事暦を明らかにしようとする。

注目点は、同墓の三本の柱（東大柱、西柱 1・西柱 2）である。

東大柱は、ユリウス暦で【3 世紀の？】2 月 21 日・10 月 22 日に朝日の影が墓壙の中心を貫く。2 月は祈年祭の開催期であり、10 月は収穫祭と想定できる。

ただし平気法で考えると、両日は雨水（正月中気）と霜降（十月中気）に当たる日である。よって平原 1 号墓の東大柱は、後漢四分暦に基づいて立てられたのではないかという仮説を提示する。倭国王帥升が安帝の永初元年（107）に後漢に朝貢しているので（『後漢書』倭伝）、これを契機に後漢四分暦が伊都国に持ち込まれ、暦に詳しい人間の指導の下、東大柱を立てたという推測ができる。

次に**吉野ヶ里遺跡北内郭の方位**を再考する。その中心軸線が真東から北に 31.2 度北に振れている。

これは 18.6 年周期で訪れる「高い月」の極大期より、2 年前の、冬至【の日？】付近の満月の出の方位に誤差なく一致する。実年代は 216 年と 235 年が候補である。

郭内の物見櫓状の建物 3 棟の軸性は、前年【215 年、234 年？】冬至頃～2 月 21 日の 3 回の満月の出の方位と一致する。

そこで報告者は先にこの施設を、満月の月の出観測施設だと推測した。ただし今回は、この推測を修正して、後漢四分暦に基づく夏正（冬至の翌々月を正月とする）の暦による施設だとする。

3 世紀の標準的な冬至はユリウス暦 12 月 22 日であり、平気法（1 気＝15.22 日を加算して二十四節気を定める）で 2 月 6 日が立春となる。この日が朔である「朔旦立春」であるのが、216 年と 235 年である。

つまり吉野ヶ里遺跡北内郭の 3 棟の建物は、後漢四分暦による朔旦立春の年に、年初前後の満月の出を観察する施設であったという結論となっている。

【確認】

北條報告では、暦の基点となる天正冬至を 3 世紀の実際の冬至頃（12 月 22 日、黄経 270 度）に設定しているようである。

後漢四分暦なら、その暦元から計算した天正冬至は、建安二十年十一月十七日（ユリウス暦 215 年 12 月 25 日 54.0000）、立春は建安二十一年正月三日（ユリウス暦 216 年 2 月 8 日 39. 6562）である。※

※[中華暦 \(からごよみ\) \(wagoyomi.info\)](http://wagoyomi.info)、王雙懷主編『中華日曆通典』(吉林文史出版社、2006年)

後漢四分曆は、冬至の太陽位置を確定して曆法を設定しているが、1太陽年 365.25 日が実際の 365.2422 日より 0.0078 日長い為、冬至時刻が徐々に遅れていく。大橋由紀夫(大橋 1982)によると、元和二年(85)の改曆で、月食予測法を除く後漢四分曆の計算法が確立する。たとえば西暦 215 年はその 130 年後なので、1.014 日分の誤差が堆積していたことになる。

次に、魏の明帝の青龍二年十一月十六日冬至(ユリウス暦 234 年 12 月 24 日)、立春は青龍三年正月三日立春(ユリウス暦 235 年 2 月 8 日)となる。魏では景初元年(237)より、景初曆を使用する。

#### 【考察】

##### 平原 1 号墓について

- ①平原 1 号墓の東大柱は、厳密な意味での雨水の日を意識したものというより、立春を 15 日程過ぎ、昼もやや長く、気温もやや上がった時期を意識した曆柱と考えた方がよいのではないか。
- ②東大柱設置に際して、後漢四分曆による具注曆を所持した渡来人が指導した可能性は排除できないが、農事曆としては定気-平気の 2~3 日の差異は大きな問題ではないと考える。
- ③裴松之注『魏志倭人伝』引用の『魏略』に「その俗、正歳四節を知らず、ただ春耕秋収を計りて年紀となす」という記述がある。東大柱の影が 2 月 21 日・10 月 22 日に対応するのは整合性があるのではないか。
- ④ただし東大柱の影が墓壙の中心を貫く思想的な意味は説明がほしいところである。墓主に集落の守護者という意味があるのだろうか？

##### 吉野ヶ里遺跡北内郭について

- ①ユリウス暦 216 年、235 年とも、平朔正月一日は 2 月 6 日で、立春は 2 月 8 日なので朔旦立春とはならない。
- ②朔の観測は日食時以外にはできず朔時刻は理論値なので、具注曆を所持していなければ実用性に欠けるのではないか。
- ③216 年 2 月 8 日(佐賀市)はステラナビゲーター11 で 19 時の月齢 2.9、235 年 2 月 8 日は月齢 3.1 となる。もしも四分曆の立春にこだわるなら、「初月立春」と言えるかもしれない。
- ④一番夜が長く、寒気が厳しい時期から、それがやや緩む時期の満月に合わせて施設を造り、それが 216 年もしくは 235 年という可能性もあるのではないか。
- ⑤ ④の推測が正しければ、この施設は年初の満月への信仰に関わる施設と言えるかもしれない。後世の小正月との関係も想像される。

【参考文献】

大橋由紀夫 1982 「後漢四分暦の成立過程」『数学史研究』 93

(付記) コメント作成に際して、竹迫忍氏の助言を頂いた。